

序

筑波大学の大学院の応用言語学コースが学生の論集を世に問うことになった。本コースには一般言語学コースとの合同で、学生の製作する論集がある。しかし、教官が指導し、査読をする正式な（大学の予算を使った）論集を発行するかどうか、かなりの年月検討し続けてきた。これには賛否両論ある。まず、否は、本コースの対象である応用言語学の分野にはかなりの学会誌がある。大学院の学生が将来の専門家として育つための登竜門は査読のある学会誌に論文を載せることである、というのが主な理由である。それに対して、賛は、学会誌の査読に合格するのはそう簡単なことではない。未熟な論文でも世に問うて、いろいろな批判を受け、さらにいい論文にしていくこと、さらに、本コースではこんな研究が行われているという、いわば、本コースの存在を学界に認識してもらおうという意味がある、ということである。そして、学生には学会誌で勝負することを極力奨める一方、本コース独自の論集を作ろうということになった。

ただし、本論集は、学生の点数稼ぎだけを目的としたものではない。貴重な国費を使うものである。教官と学生が一体となり、われわれの教育、研究を世に問う、ということが重要なことである。したがって、教官の論文も巻頭に載せること、学生から論文を募集し、複数の教官による査読を行うこととした。ただ、前記の目的に従って、査読のレベルは学会誌のそれではなく、未熟であっても、これから発展させる可能性のあるもの、さらに、本コースの研究を世に問うものという観点から行った。

本号では教官の論文は本年度で定年退官する芳賀純教授にお願いした。

ここで、本コース、正式には、博士課程文芸・言語研究科言語学専攻応用言語学主専攻について説明したい。おそらく日本の大学の大学院で応用言語学という分野が独立してコースを設けているのはほとんどないであろう。本学は開学当初からこの主専攻が存在した。「応用言語学」の定義はむずかしい。世界の大学あるいは学会でもいろいろな分野が応用言語学と位置付けられたり、なかったりということが見られる。本学の応用言語学は当初、社会言語学、心理言語学など、いわゆるハイフン言語学（英語でいう socio-linguistics、や psycho-linguistics など当初ハイフンが入れられた言語学の学際領域）が主であった。そこに同じくハイフン言語学のコンピュータ言語学が加わり、さらに、新たに入学定員が付いた日本語教育が加わった。

筑波大学は講座制を採用していないため、何講座という説明は出来ないが、本研究科の中では本コースは圧倒的に大きい。現在、担当教官が8名、在学中の学生が40名（本学の博士課程は5年一貫性を取っているので1年次から5年次までの人数）という大所帯である。また、とりもなおさず、1986年以来、課程博士が8名誕生している。他の分野、特に理工科系に比べれば大きいとは言えまいが、すくなくとも文科系の中では評価できる数字だと自負している。これは、とりも直さず、教官が博士課程の一番大きい任務は博士号を授与すること、それに見合う博士論文を提出できるよう指導すること、であるとの共通認識を持っているからであろう。

本コースは教官も学生もの専門領域が多岐にわたる、いわば雑居家族である。しかし、コースがカバーする領域が多様であることが研究会などの討議を刺激的なもの、活発なものとしている。ところで、本コースでは毎月研究会を開き、学生の研究発表を行っており、学生は原則として、年1回、ここで発表することが義務づけられている。

このような環境、意図から生まれた論集である。この論集からわれわれの教育を評価されることも覚悟している。さらに、本論集に載っている論文に関して建設的な「酷評」をお願いしたい。学問の世界では、遠慮のあるコメントは意味があるまい。真理の本質に迫る真剣勝負があってこそ学問の進展につながる。その意味で本論集の論文に対して、ご指導を賜ることを切に望むものである。

(草 薙 裕)